

# 七友会誌

## 創刊にあたって

七友会会長



落安 昭三

早いものでこの学窓を巣立ってから、一年が経ようとしています。皆さんも、とうに学生気分がぬけ立派な(?) 社会人として、それぞれの職場において、活躍されていることと思います。

我々、同窓会役員も、会員名簿発行以来、次の仕事をするため、何度か会合をもち、話し合ってきました。しかし、それぞれ仕事をもちその上での同窓会の活動ということもあり、時には甘えも生じ、同窓会の活動がおろそかになってしまっていたというこはいなまません。

しかし、時も押しつまり、新たに、この学窓から、二期生の諸君の卒業を迎える季節となり、我々同窓会役員も、先輩として、なん

らかの形で後輩諸君の卒業を祝し、また、未知の社会の中に飛びこんでいく後輩諸君の不安な気持を幾らかでも、柔げてあげればという気持で、今回、おそまきながら、待望の会報を出すはこびとなりました。

考えて見れば、会員名簿発行以来、各地にいる同窓会会員と、なんの結びつきも、また連絡を持つこともなく、時が過ぎてしまい、皆さんの気持も、自然に同窓会から離れてしまっていたところだと思えます。それと同時に私たちが役員にもいえることですが、

しかし、これからは年に一〜二回発行する予定です。この会報を利用し、会員同志、互いに近況を連絡しあい、一段と、七友の友として、また、思い出多いキャンパスにおいてともに酒を飲みかわし、あるいは議論しあった親友として、距離的にはどんなに離れていても、互いの気持だけは結びつきを強くしていきたいものだと考えています。

また、こんかい、役員一同の同意のもとに

題字

大畑人文社会科学部長

昭和57年3月13日発行

岩手大学  
人文社会科学部同窓会

創刊号

我々の思い出深い学舎に、植樹することになりました。この植樹は、幾らかでも学舎の中に我々の気持ちを残し、いつの日かこの学舎を訪れた時、この木々の成長とともに、自身自身の成長も確かめて行くということもあるように考えています。いつの日かこの木々が成長し花々を咲かせ、キャンパスに色どりをそえる日、我々同窓会自体も大きく成長していただきたいものです。

最後に、同窓会会員を代表し、後輩諸君の卒業を心から御祝い申し上げ、またこれから前途に幸多からんことをお祈り申し上げ、会報第一号の発行にあたってのあいさつとさせていただきます。

### 目次

創刊にあたって.....	1
人文社会科学部同窓会誌	
卒業生諸君へ	
創刊に寄せて.....	2
一 晴れの首途に当って.....	2
卒業に際して.....	3
窓(会員のたより).....	4
憶い出.....	6
支部の動き・理事会この一年.....	7
会計中間報告.....	8

## 人文社会科学部同窓会誌 創刊に寄せて



学長

原田三郎

私は、昭和五十五年度岩手大学第二十九回卒業式で、「とりわけ、今回の卒業式には、去る昭和五十二年度に開設されました人文社会科学部の第一回卒業生が包含されており、本学にとり、一つの画期をなす卒業式として、ひとしお意義深いものがあるであります。」と述べました。

その第一回卒業生諸君によって、はやくも学部同窓会が結成され、会誌の創刊が企てられるという。まことに、その英断と努力とに深甚な敬意を表さざるをえないし、かつまた心からの祝意を表する次第です。

思えば、五年前、諸君と私とは共に始めて岩手大学に来て、人文社会科学部の開学を荷担った間柄です。そのとき私は、開講一番、*aller Anfang ist Schwer* (何事も始めが困難だ) を説き、学部の歴史を拓く諸君の奮起を訴えました。そして、何よりも肝要なことは、岩手大学人文社会科学部の学生となつたそのことに自負をもつことであり、自から

を卑めていてどうして歴史を拓くことができようかと説きました。勢い余って、己が固有名詞を「がんたい」などと略称で呼ぶ風習を断呼返けようではないか、などと呼びかけ、諸君の爆笑と拍手を誘いました。

その諸君が、いまここに、学部同窓会及び会誌の歴史を拓くことに、私は、改めて胸迫るものを覚えます。

さて、かの高度成長は、先進諸国の国民大衆を、「飢の時代」の余沢に浴せしめました。しかしその裏側では、世界人口の七割を占める低開発諸国民の落後と飢餓が進行しました。この矛盾は、結局のところ、高度成長の破綻につながり、いまや先進諸国の国民大衆の肩に、「答の時代」の重みがのしかかりつつあります。

この厳しさこそは、現実世界の本当の姿であります。この厳しさに敢然と立ち向うなから、岩手大学人文社会科学部の真の発展と同窓生諸君の真の幸福とを追求していくこうではありませんか。



(2・9)

## 卒業生諸君へ

—— 晴れの首途に当って ——



人文社会科学部部長

大畑 莊一

学園のそこここにそろそろ春の息吹きの感ぜられる候、

人文社会科学部における四年間の学生生活に終りを告げて、実社会に巣立っていく新しい同窓生諸君、御卒業おめでとう。心からお慶びを申し上げます。

喜びも悲しみも幾年月、人生のうちで最も多感な青春時代の一時期を過ぎた本学を、この度去られる心境、感慨も一入であろうかと思ひます。いや別に感慨など何もないという人もあるかも知れない。しかし長い人生において何らかの転機に立って、過去をふりかえり、将来に思いをはせ、人生の一駒一駒をより有意義なものとして積上げることが、また意義のあることと考えます。

諸君の大多数は、こゝで学生生活に別れを告げ、実社会の一員として巣立たれるわけで年月が経るにつけ必ず母校への、そして学生時代への懐古を催されるのであります。卒業生諸君は、早速この四月から種々な社

会に入って第二の人生を送ることになるわけですが、新たな理想と希望をもって入った社会での現実の仕事と、周囲の人々の生活態度に、失望と矛盾を感じる場合も多々あるかと思ひます。これも人生経験の貴重な体験の一つです。

私は諸君へのはなむけの言葉として一言申し上げたいことは、これからの社会人としての生活の中心を何におくかを早く決めてほしいということでありませう。社会人として与えられた仕事に励むのは当然のことですが、仕事だけの人生とはあまりにも味気ないものだと思います。

趣味を深くすることも良いし、また特殊な資格や技能を身につける為に努力するのも結構でしょう。仕事が終わってからの夕方からの、あるいは休日の時間を将来の長い社会人としての生活を充実したものにすゝる為に、それぞれの個人に適した送り方を早く見出し、ほしいと思います。

卒業生諸君は、第一回の卒業生と同様に、人文社会科学部創設時代に入学されたいはば人社部草分けの人達であり、諸君の活躍は、今後の後輩諸君に限りない励みと希望とを与えることになりますので、健康に留意して、益々活躍なされることを期待しております。

ます。また折にふれて近況を母校にお知らせ下さい。

## 卒業に際して

### 卒業にあたって

地域文化コース

鈴木ルリ子

さらば、モラトリアム時代よ、数々の特権に浴してきた学生時代よ。

こんな言葉が口をついて出てきそうな今日の頃である。今になって思えば、「学生時代」という言葉が妙になつかしげに、甘く心に響く。高校までと違って、大学に入ってからはかなり自由が許された。時に大人としての扱いを受けるようになった。一応は、単なる詰込み勉強から解放された。そして、授業には出ていたものの、何となく過ごしてきた一、二年。三年になって演習関係の授業が増えて少々あわてだした。英語辞書との格闘の日々。一人の人間として女として、友達とも何かしら心わって話せるようになったのも、この頃であったような気がする。自立するアメリカ女性をはじめとするいくつかの講演会へも参

加した。また私は、「我、好奇心強かれども意志薄弱なところありて、専攻外にも興味もちし事を少々勉強すれども、齒たたずして途中で挫折すること、たびたびありき」というような有様であった。私事は別として、カリキュラム編成が柔軟であることが一つ、人社の良さであると思う。確かに専門性の深化の点で問題も残ろうが、プラス面を評価したいと思う。

さて、四年になってからの日々というもの、は、教育実習、……、就職活動、卒論と今までの中で一番めまぐるしく過ぎたように思う。就職活動では、私も世間の風の冷たさにちよっぴり触れた。キャンパスライフは、ある意味で温室である。今まで、世間は、学生にはひどく寛容であったことに気づく。と同時に、やはり男子学生と比べた時、女子学生に対する目は、まだ冷やかである。私はともかく、就職が決まり、その会社の二期生として社会人としてのスタートを切ることになっている。人社の二期生であることを考え合わせると、何かしら幸先が良く思われる。

卒論については、私の計画性のなさど力不足で不本意な出来に終わったが、ただ一つ、確かに勉強したという思いだけは残る。

今、私は学生時代に終わりを告げようとし

ている。舞台で朗読してきた一冊の本を閉じるように、静かに、そして名残り惜しげに。

## 卒業にあたって

社会科学コース

安部 光一

昨日、大学生として最後の講義をうけた。講義室の堅い椅子に座って九十分とはずいぶん長いものだと思いつながら、耳をかたむけたり昼寝をしてみたり；もうこれからの人生でそういう機会はないのだと考えるとさみしい気がする。

今までの学生生活を顧みると、私はここでどれほどのことを学んだのだろうか、これらの社会に対して胸を張って主張できるほどのものを身につけたかと考えるとはなはだ疑問が残ってしまう。毎回講義には必ず出席する真面目な学生ではなかったし、試験の時には自分のノートより他人のノートを、という有様だった。

しかし、あげればきりのないほど後悔が浮んでくるとしても、私にとってこの4年間は有意義なものだった。多くの人とあい、多くの友人を得た。クラブ活動を通して人間の組織の中で苦勞もすれば、また苦勞以上の大き

な喜びをも味わった。最後の定期演奏会で後輩達に胸上げしてもらった時の感激は決して忘れることはないだろう。素晴らしい友人や良き先輩の中で私自身、人間的にいくらかでも成長したと思っている。

卒業も就職も確定的という今の晴れやかな気分は、四ヶ月前、病院のベッドで将来を考えた時のそれとは較ぶべきもない。怪我による右眼失明の危険と就職の面接が間近といういらだたしき、最も苦しい時期だった。しかし、多くの人の尽力や激励でこれを持ちこえそして自分の前方に道が開けると感じる今、私が終えようとしている四年間の大学生活は実に素敵な時間だった。確かに私の賭けたものがそこにあり、私の残した何かがあるような気がする。これから先、常に前進し続けるとは限らない。しかし立ち止まっても、この四年間を振り返ってみれば、きつと希望を見い出せると思う。



り、「先生、一です」と言われ、先生と認められた時のうれしさは今も忘れられない。

また、こちらが期待していなかったことまで理解してくれ、授業が盛り上がる時もある。逆にだらだらとした授業になってしまう時もある。その時にはなかなか理解してもらえず、教室でいらだち、職員室にもどって、なんであんな授業をってしまったのかという悔しさに悩まされるのである。

さて、それでは普段の生活はどうかというと、学生時代と大きく変わったことは、朝六時半に必ず起床するということである。学生の中には早くとも八時、へたをすると昼近くまで寝ていたのが六時半に目が覚めるというのは、我ながら驚異である。八時には学校にいて出勤簿に判を押している。

そして放課後、部活動や何やらで六時まで一日最低十時間は学校に詰められていることになる。どっかのお役所のように勤務時間が過ぎれば「はいさようなら」とはいかないのだ。授業で声はかすれ、部活動でたくさんになった体は、当然夜のやすらぎを求める。夜の巷を徘徊して喉を潤すのである。それで五月まで自炊していたのが、六月からは外食専門になってしまった。学生時代よりアルコールの量がふえたのはどうしたわけか。こんな生活

窓

## 千葉県我孫子市にて

山沢 宏行

思えば三月に卒業し、四月には教壇に立つて一年が過ぎようとしている。はじめての教師生活、見知らぬ土地での生活等、すべて一からの出発だった。

新設校というハンデを背負っての高校は、学習指導というよりも生活指導に明け暮れた一年だった。授業の予習に手いっぱいなのに登校指導、下校指導、服装検査に時間を費し自分のやりたいことなどほとんどできなかった。それでも、自分は高校教育の最前線にいるのだ、ここを乗り切ればどこへ行っても通用するのだという先輩の先生方のアドバイスを信じ、やってきたという次第である。

とはいっても、教師としてはじめて教壇に立った時の緊張、生徒に理解してもらった時のうれしさ、理解されなかった時のくやしきさのように授業を進めたらよいか予習のむずかしさを味わった。たかだか五つぐらいしかちがわないう三年生に教える時には、大学出たての私が授業をやってわかってもらえないかなという不安でいっぱいだった。いざ授業にな

の中で唯一の楽しみは、昼近くまで眠れる休日である。生徒より待ち焦がれている。

以上、初任教員の一年間であったが、三年生の最後の授業で、「先生どうもありがとうございました」と言ってお礼をしてくれた生徒達に心動かされ、教師としての喜びをかみしめた時でもあった。

各方面で活躍している同朋はどんな生活を送っているやら。

(千葉県立湖北高校勤務)

## 一年目に……

中澤 英寿

卒業、そして就職して早一年が過ぎようとしている訳ですが、事此処に至ってみると、この一年が忘我夢中であつたとしみじみ思います。社会人一年目なんて、誰でもこんなものなんでしょうか。

幸か不幸か、区役所の固定資産税課と言う割合気楽な部署に就いた私は、学生当時と相変らずの服装で、相変らずの言行を為し、周囲の輦轡をかっていきます。一人一人が、一年足らずでそんなに変わるものではないんですよ。(勿論、努力は怠っておりませんが)

私は、区内の十七の町の固定資産税土地分の課税処分を担当しておりますが、最初に担当地域の地図を手渡されて、この域内の土地を評価し課税するように言われた時は、本当にやってしまったって良いものかと悩みました。私が納税者だったら、新人職員の、それも私が算出した税額なんか、絶対に信じないだろうと、本気で思いましたね。

まあ、最近ではそういった謙虚な不安も影を潜め、電話などでも平気で個人名を出せるようになりましたが、同時に先輩職員との摩擦も多くなりました。

納税者といっても、総体では自分の納めている税金に結構無頓着なものです。私自身、これは公衆相手ではなく大衆相手の仕事だと、時々思ってしまうほどですから……。

私はこれが嫌なのです。特に過重課税の場合には、私が専決できる範囲内では、即刻余分の税金を返す事にしています。そうやって、誤りはすぐに通知され訂正されるといって信用を培っておかないと、後々ろくな事は無いと思うのです。でも、なかにはそう考えない人もおられます……。まあ、少しは辛い事になる訳です。

しかし、職場（市）が私に期待しているものなかに、私の言う一寸新鮮な感覚も含まれているのではないかと考えます。私が先輩となった時を思うに、小生意気な後輩を小面憎く思うことは勿論でしょうが、それ以上に、世故に長けすぎた後輩を不気味に思うでしょうから。

以上、一寸気を大きくして、一年目に…。

（横浜市職員）

香川大学へ移られる高野真澄先生に御寄稿をお願い致しました。尚、退官なさる菊池亮介先生には御多忙との事で次回にお願い致しました。

## 憶い出



法学研究（憲法）

高野 真澄

昭和五十二年五月、岩手大学人文社会科学部が創設されて、早くも五年の歳月が流れた。このたび、不図も、香川法学部に配置換となるに及んで、こんど創刊される同窓会誌に何か「憶い出」を書く

ように頼まれた。

ひとくちに、学部創設といっても、それは大変な仕事であって、構想に構想を重ね、それを夜を日に継いで議論をして積み上げてゆく大きな事業といわねばならない。とりわけ、当学部のように、総合学部構想を下敷にしている場合の関係者のご苦労は到底筆舌には尽しがたいであろう。私は、大変粗忽な人間で、そういう苦労も知らないために、多くの方々にご迷惑をおかけしたと思うが、新学部の自由で寛容の空気ははじめから自然な私たちで私を融和の境地に誘っていただいたことを、心から感謝している。

創設学部は、いわば生まれたての赤ん坊のようなものであるから、何もかも一から作り出してゆくしんどさはあるものの、牢固たる師弟関係や古い研究室制度に囚われずに清新な学風を築いてゆくことができるという決定的なメリットがある。それに、当学部を選択して入ってくる学生諸君も人生意気に感じ、揚揚たる態度が窺え、研究、教育の両面で互いに気持よく協力することができた。

盛岡にきた当座は、正直いって、なかなか

盛岡弁になじめず、何となくからかわれているような気がしたものだ。」「ことば」はその土地に住んではじめてわかるもののようなものである。おかげで、この五年間に、県下を大

体まわることができ、県内の地方弁にも接してみても、いわゆる盛岡弁とはまた相当なちがいのあることを発見した。土地柄といえば、さすがに、東北の京都といわれるだけあって盛岡は美しく洗練された街であり、地名からしても雅びている。風土に根ざす地方文化の片鱗にも触れることができた。市内三十分でスキーに行けるのも、これまた素晴らしいことである。

「去る者日日にうとし」という。盛岡をなつかしむ気持はずっと変わるまい、と念じている。同窓会の皆さんのご清勝と岩手大学の一層の発展をあわせて祈念いたしたい。

菊池亮介先生と高野真澄先生に、同窓会より記念品を贈呈致しました。両先生の御健康とより一層の御活躍をお祈り致します。

## 支部の動き

岩手県支部

十一月十四日、本町通り「華客」にて岩手県支部総会を開きました。十一月月上旬に葉書等で呼びかけましたところ、この広い岩手県各地から二十数名ものなつかしい顔がそろいました。ひよんなことから、不肖、大志田が支部長に選ばれましたが、どんなことをすればよいのやら。左の写真は、華客にて撮ったものです。が、久しぶりの顔にカメラも酔ったようです。このあと、二次会へ。踊ったり、カラオケで歌ったりと若さを発散させました。つぎは、二月頃にとり予定でしたが、会報の準備や仕事で忙がしく、なかなか開くことができません。また、なつかしい顔で飲みたいものです。全国に



散った会員のみなさんも、各地で支部をつくり楽しい交流が続くことを願っています。  
（筆・大志田）

## 理事会 この一年

- 昨年、卒業式当日をもって急ぎ設立しました同窓会は、役員の誰にとっても初めてのことばかりで、なにかと遅れがちになり、不備もめだちましたが、ようやく軌道にのってきました。簡単ではありますが、以下に一年間の活動報告をいたします。
- 一九八一年（昭和五十六年）
- 三月二三日 同窓会会則（仮）により、人文社会科学部同窓会設立。
  - 六月二八日 第一回理事会。新会則の承認、役員改選後、名簿発行等の日程を決定。
  - 七月一八日 第二回理事会。住所確認作業を八月月上旬までに完了することを決める。封筒、印鑑、口座開設等の準備を急ぐ。
  - 八月 八日 第三回理事会。会の名称を、「七友会」と正式決定。名簿作製の最終打ち合わせを終える。大学を通し、印刷を依頼する。
- 一九八二年（昭和五十七年）
- 二月一〇日 終身会費未納者多く、葉書にて早期納入を依頼する。
  - 一月一七日 第四回理事会。新会員を迎えるにあたっての諸事項の確認。二月下旬をめどに、会報発行を決定。
  - 一月三十一日 第五回理事会。会報の内容を決定し原稿を依頼。その他諸事項の確認。
  - 二月一四日 第六回理事会。原稿を確認し印刷依頼の準備。記念植樹を正式決定。
  - 三月上旬 会報発行予定
- 今回の会報発行にあたっては、高嶋才司君に多大の御協力をいただいた。改めて感謝したい。ほんとうにありがとう。

## 昭和56年度人文社会科学部同窓会会計中間報告

今年度は、同窓会設立年度であり、卒業時にその設立基金として一人二千円ずつ徴収しましたが、収入の大半は、その後徴収した終身会費によりました。従って予算は暫定予算とし、役員会の決定により執行しました。ここに役員会の決定による事業の収支について報告致します。(昭和57年2月10日現在)

収入 (単位:円)

科 目	金 額	摘 要
1. 会 費 収 入	784,000	2,000円×143名 8,000円× <u>61</u> 名 10,000円× 1名
2. 雑 収 入	5,889	銀行預金利息
合 計	789,889	

支出 (単位:円)

科 目	金 額	摘 要
1. 事 業 費		
会員名簿印刷	90,000	300円×300部
会 則 印 刷	8,000	16円×500部
会員名簿送料	34,080	
2. 会 議 費	27,460	役員会会議費等
3. 事 務 費	37,211	封筒、印鑑等
4. 特別積立金	200,000	定期預金
合 計	396,751	

### 会計から

会費収入の項(上表)をご覧になればわかりと思いますが、半数以上の会員は終身会費を収めていません。出来るだけ早く終身会費もしくは年会費を収める様お願いします。

お忙しい最中、原稿をお寄せくださった方々に厚く御礼申し上げます。尚、紙面と時間の都合上、二、三の原稿をカットせざるを得ませんでした。申し訳ございません。

△編集部より▽



右手の鉛筆が目に入った。「鉛筆」だけではどこかの新聞コラムだ。それより強いのが「鉛筆削り」だ。断わっておきたい。これは決して電動ではない。手回しに限る。

会報の編集も大詰めに来た。後は編集後記だけだ。単に「編集後記」ではつまらない。何か面白いタイトルはないものが。まず「岩手山」。誰でも考えつきそうだ。次に「チベットの紀行」。イメージが暗すぎる。明るく将来性のあるタイトルはないものか。

はたと思いついた。生涯この編集に携わる訳ではない。今回限りだろう。ならば適当に命名しよう。それでも構うまいと。

